

米国図書館と利用者の在り方について
視察を終えての研修報告

広島修道大学図書館 情報サービス係
八木 祐己

私は広島修道大学図書館の情報サービス係としてカウンター業務に携わっている。カウンターに座っていると利用者の様子がはっきりと分かり興味深い。備え付けのPCで課題に取り組む者、個人・複数で利用できる学習室の手続きに来る者、新着の図書をじっくりと吟味する者と様々だ。しかし、図書の貸出・返却以外で直接カウンターに来て図書の探し方を聞いたり、レファレンスに質問に来たりする利用者は少数である。大学図書館という教育機関の一組織として、どのように学生と関わり役割を果たすのか、ということは私がこの業務に携わる上での課題である。米国では図書館職員と利用者がどのように関わっているのか関心を持ち、今回の米国図書館研修への参加を決意した。

まず私が関心を持った大学図書館は、ラトガース大学図書館 (Alexander Library) である (図1)。この図書館は1766年に設立され、アメリカで8番目に古い大学図書館である。情報学の分野としては全米で7番目に相当する。この図書館は、ラーニングコモンズ (協働学習) において先駆的な取り組みをしている。教育者と図書館、学生が協働し取り組むプロジェクトは大学図書館として新たな取り組みと言える。その例として、デジタルプロジェクトが挙げられ、これは紙媒体をデジタル化し、学術的貴重資料を後世に残す取り組みである。今までに紙の地図、ローマコインの画像、政府からのデジタル化の依頼があり、このプロジェクトに参加した学生に対し、単位を付与してきた。学生が課題をレポートとしてまとめるだけではなく、ビデオ作成に関わることで、自分自身の考えや思いを表現する練習になる。机上の学力や知識だけではなく、学生の主体性を育てていこうとする姿勢が見て取れた。また、教育者、学生が一体となって図書館プロジェクトに加わり、大学全体でプロジェクトを推進しようという意気込みを感じた。

次に、ロヨラ大学図書館 (Richard J. Klarchek Information CommonsThe Beinecke) にも興味を持った (図2)。この図書館は、全面ガラス張りの建物で館内から海が一望できる。開放的で明るく、また館内ロビーも社交的な場にしたいとの考えからPCやボードゲームが備え付けられていた。この図書館は24時間開館しており、夜間でも利用可能である。夜間の運営は職員ではなく、アルバイトの学生が行っている。主な業務はIT機器の貸出で、その対象はカメラ、PC、充電器等多岐に渡る。レファレンスなど専門的な知識が必要な業務については、翌日に職員が引き継ぎ対応をしている。24時間開館していることの問題は、職員不在時にトラブルや事故への対応に追われる可能性があること、夜間の時間帯の勤務スタッフの確保に苦慮していること、そして建物のメンテナンスが難しいこと、である。しかし、どの時間帯にも利用可能な図書館に対する学生の満足度は高いようだ。私が所属する広島修道大学図書館は24時間開館ではないものの、職員2名、学生スタッフ2名の体制で夜

間運営に携わっており、危機管理意識を強く持つ重要性を再認識した。

今回の研修の中で一番興味深い取り組みを行っていた図書館はハロルド・ワシントン図書館 (Harold Washington Library Center) である (図3)。世界最大級の図書館として知られている。自動返却を行う装置を設置しており、70以上ある分館に返却処理を行うため、数回処理を重ねて行っていた。予約の入っている図書には自動的にラベルが貼付される仕組みとなっており、人的コストを削減するには便利であると感じた。その他にYOUmediaという10代専用のルームが有り、テクノロジーに関する知識を同世代で共有する場として活用されていた (図4)。子供たちは設置されたPCや3Dプリンターを自由に利用することができる。時折ゲームのトーナメントを開催し、テクノロジーへの敷居を低くすることでテクノロジーに詳しい子供たちが、そうでない子供たちを引き入れることを狙いとしていた。このルームには自動貸し出し機が置かれているのだが、その利用率の低さから「世界で最も重い文鎮」と揶揄されている。これは子供たちがカウンターに座っている大人たちとの交流を求めていることの表れで、職員もまた子供たちとの会話を楽しんでいるとのことだった。ここに図書館の狙いがあると感じた。交流を通して職員は知識や情報の提供を行うことができ、子供たちは同世代で共有した知識に加え別のものの見方を身に着ける機会にもなる。別の階には、CDL Innovation Labというモノづくりを行う専用スペースが有り、ここで開催されるクラスは無料で参加することができる。オープンアカデミーは参加費が必要だがテクノロジーに関心を持てるような環境づくりがなされていた。過去に3Dプリンターで作成された作品が机上に展示され、部屋の雰囲気は明るめの色彩で彩られていた。14才以上であれば利用可能で、以前この場所に脳手術を控えていた子供病院の医師がやって来たそう。彼は3Dプリンターを利用して子供の脳を再現し、作成された脳で手術の練習を行い、その後の手術を無事成功させた。この話はこのスペースの逸話として語られている。広報は主に利用者の口コミに頼っており、口コミにより利用が増えるほど市民のニーズを把握する機会が増え、このスペースの存在価値がより高まっていくように思える。このように読書へのサポートだけではなく、利用者実際に体験させることを新たな図書館の取り組み、あるいは付加価値にしようという取り組みを行っている図書館が多く見受けられた。これら以外にもコロンビア大学やシカゴ大学を訪問したのだが、総じて言えることは利用者が図書館を活用したくなる環境づくりを行い、ニーズに応える姿勢を示している。館内での図書を用いた知識の普及に努めるにとどまらず、複数の施設と協働し、利用者に能動的に体験させる機会を増やすことで知識の深化、コミュニティの形成を狙っているように感じた。「利用者自身が主体性を持って体験し実感すること」ができる取り組みを考えていくこと、これが今回研修を通して学んだキーワードである。

最後に公共図書館、大学図書館、ALA (米国図書館協会) 総会へ参加し有意義で濃密な時間を過ごすことができた。8日間という日程は多くの学びを持ち帰るには長いようで短かった。参加者の一人が「私たちはこうして研修に参加している時は大きな驚きと刺激を受けて満たされているが、実際に職場に戻ると普通の業務に追われてこの研修で学んだことを忘

れがちになる。この経験をどのように活かしていけば良いか。」と ALA 関係者に質問をしており、印象的だった。この体験を単に「参加して良かった」で終わらせるのではなく、訪問した図書館の取り組みを共有し、自館の課題を見つけ、館員全体で解決に向けての取り組みを推進することがこの研修の意義である。またこの研修に参加したことで、学習支援センターと協同で行っている学生への学習相互支援や、教授と協同し学生の参加を促す語学力向上を目的とした英語多読企画など本学図書館の良い取り組みにも気づくことができた。今後は利用者自身が主体性を持って学びに取り組むことができるよう、今回学んだ経験を元に自身の図書館職員としての資質向上に努めていきたい。



図1 Alexander Library



図2 Richard J. Klarchek Information Commons/The Beinecke



図3 Harold Washington Library Center



図4 YOUmedia